

19世紀後半における「オーストリアの標準ドイツ語」

—音楽家 J. シュトラウスと G. マーラーの書簡に基づく分析

鯨岡 さつき

1. 複数中心地言語としてのドイツ語

ドイツ語は今日、複数中心地言語 (plurizentrische Sprache) であるとされる (高橋 2010: 9-10 を参照)。その考え方に従えば、ドイツ語の標準語はドイツのみでなく、オーストリアに特有な表現が含まれた「オーストリアの標準ドイツ語」が存在すると言うことができる。この Kloss (1978) が提唱した「複数中心地性」に賛同した Clyne (1984) は、オーストリアで用いられているドイツ語が国家の標準変種としての「オーストリアのドイツ語」というカテゴリーで捉えられずに、上部ドイツ語という方言圏名で分類されることに対して、「これらの国 [オーストリアやスイス]¹⁾の国家的な標準変種はしばしば価値が低く評価されている」(Clyne 1984: 4-5) と反論している。

オーストリアの標準ドイツ語に関して歴史的に考察する際に重要なことは、オーストリアの標準ドイツ語という概念がプロイセン的の標準ドイツ語という概念との対立の中で存在し得たことである。18世紀のマリア・テレジア治世下 (1740-1780) にはすでに、オーストリアはドイツの「ザクセン地域から『模範的な』形式を受け入れ」(Ammon 1995: 118) ており、18世紀末以降にはさらに、プロイセンのアーデルングの文法が規範文法としてオーストリアにも影響を与えていた (Wiesinger 2003: 2990 を参照)。モーツァルトの書簡に綴られたドイツ語について研究した Reiffenstein (2009b) によれば、ウィーンで生まれたモーツァルトの2人の息子 (Carl Thomas Mozart 1784-1858, Franz Xaver Wolfgang Mozart 1791-1844) は、19世紀前半に書簡を書いた際、「今や一般に通用していた [プロイセンの] 標準ドイツ語の規範に当然のこととして従った」(Reiffenstein 2009b: 217) という。19世紀後半になり、「プロイセンがオーストリアをドイツ連邦の同

1) [] は、筆者による補足であることを示す。以下同様。

盟から外すことに成功した 1866 年以降によく、オーストリアは言語的に特別な地位を確立するための前提条件ができた」(Ammon 1995: 120)。Wiesinger (2003) によれば、続く 1870 年代に「オーストリアの標準ドイツ語」という概念が成立した (Wiesinger 2003: 2994 を参照)。

以上のようなオーストリアのドイツ語の歴史に関する認識を踏まえて、本論文は、19 世紀後半のオーストリアにおける言語の実態を分析し、言語規範と方言の関係について考察しようとするものである。19 世紀後半のオーストリアの言語的実践と言う場合、それは無限に近く存在するので、本論文では調査の対象として、前述したモーツァルトとその息子たちと同じくオーストリアで生まれ育ち、とりわけウィーンで活躍した 2 人の音楽家、ヨハン・シュトラウス 2 世(1825-1899 年)とグスタフ・マーラー (1860-1911 年) の書簡に書かれたドイツ語を扱うこととする。シュトラウスとマーラーの書簡には、モーツァルトの息子たちと同様にプロイセン的な標準ドイツ語が用いられていたのであろうか。この 2 人の書簡には、オーストリア的な特徴は見られないのであろうか。本論文は、この点に関して調査を行い、19 世紀後半のオーストリアにおけるドイツ語の現実の一端を明らかにしたいと思う。

2. Lewi の『オーストリアの標準ドイツ語』(1875)

2.1. その著作の概要

19 世紀後半のオーストリアは、ドイツ語の規範という観点ではいわば蚊帳の外存在となってしまったので、「オーストリアの標準ドイツ語」と言った場合にも、「オーストリア的な変種はどうしても『誤りのあるもの』であると思われてしまった」(Wiesinger 2003: 2994)。そのような意識に則って書かれたのが、1875 年に出版された Hermann Lewi の『オーストリアの標準ドイツ語。その最も際立つ間違いと誤った諸特徴に関する記述の試み (Das Österreichische Hochdeutsch. Versuch einer Darstellung seiner hervorstechendsten Fehler und fehlerhaften Eigentümlichkeiten.)』(以下、『オーストリアの標準ドイツ語』と表記)である。

この約 50 ページからなる著述は、序論などを除く 8 つの章において、さまざまな文法カテゴリーについて論じている。その中でも、「オーストリア語法」(11 ページ)、「複合名詞」(9 ページ)、「分詞」(7 ページ)が、ページ数の面で抜き

ん出ている。以下本章では、「オーストリア語法」、「分詞」、「前置詞」を中心に
 見てみることにする。

2.2. 「オーストリア語法」に関する Lewi の説明

まず、Lewi (1875) は「オーストリア語法」について「オーストリア語法」の
 章のはじめで次のように説明している。

オーストリアの標準ドイツ語には、とくに以下のものが多く見られる。すなわち、
 奇妙なもしくはまったく間違った語構成法、独特の単語と表現、本来の意味が歪
 められた単語である。(Lewi 1875: 15, 筆者訳)

上記の記述を見てみると、Lewi (1875) は「独特の単語と表現」、つまり語彙
 だけでなく、「奇妙なもしくはまったく間違った語構成法」、「本来の意味が歪め
 られた単語」といったぐあいに、造語法や語義の変容も「オーストリア語法」と
 して挙げていることがわかる。

ここで、今日一般的に「オーストリア語法」として捉えられているものと Lewi
 (1875) の上記の記述を比較してみることにする。まず現代において「オースト
 リア語法 (Austriazismus もしくは Austriazismen)」とは、Glück (2010) によれば、
 「オーストリアの変種にとって典型的なことばのことである。また他のドイツ語
 圏では、一般的ではなく、典型的にオーストリアらしいものと見なされる表現 (例
 えば、生クリームを意味する *Schlagobers*) や、あるいは理解できない表現 (例
 えば、スグリの実を意味する *Ribisln*、トマトを意味する *Paradeiser*) のこと」(Glück
 2010: 77) とある。このように、現代において「オーストリア語法」というと、
 特有な語彙がとりわけ説明に挙がり、Lewi (1875) が述べる「オーストリア語法」
 は現代と比べると、造語法や語義の変容も「オーストリア語法」の説明に加えて
 いる点で、今日の一般的な説明よりも含まれる要素は多いものと考えられる。

「奇妙なもしくはまったく間違った語構成法」としては、プロイセンのドイツ
 語では付かない接頭辞が付いたものが挙げられている。例えば「教化的な」を意
 味する *erbaulich* はオーストリアでは、*auferbaulich* であるという記述がある (Lewi
 1875: 21 を参照)。また、プロイセンのドイツ語でも何らかの接頭辞が付くこと

ばではあるものの、プロイセンとは違う接頭辞が付くことばもある (Lewi 1875: 17 を参照)。また、プロイセンのドイツ語とは異なる接尾辞が付いたことばも挙がっている。例えば、名詞の *Inländer*, *Ausländer* (自国民、外国人) を、対応する形容詞である *inländisch*, *ausländisch* (自国民の、外国人の) の意味で使うと紹介されている (Lewi 1875: 20 を参照)。

語彙的に異なる例としては、*Obers* (クリーム)、*Fisolen* (インゲンマメ) といったような (Lewi 1875: 20 を参照)、今日でも「オーストリア語法」として意識されるようなことばがいくつか見られる。「独特の単語と表現」として Lewi (1875) が挙げる「オーストリア語法」には、動詞形態論に関わる例も挙げられている。例えば、*geben* (与える)、*lesen* (読む)、*sehen* (見る) の命令形単数においてそれぞれ、*geben* の命令形単数 *geb* の代わりに *gebe*、*lesen* の命令形単数 *lies* の代わりに *lese*、*sehen* の命令形単数 *sich* の代わりに *sehe* が使われるという (Lewi 1875: 16 を参照、詳しくは 5.2.2 章を参照のこと)。

「本来の意味が歪められた単語」としては、つづり上は同じだが、オーストリアでは意味が異なるものが挙げられている。例えば、「後ろへ向かって；後戻りして」という空間的・時間的に後ろへの方向性をもつ副詞 *rückwärts* がそうである。オーストリアでは、方向性が抜け落ち、「後ろに」を意味する *hinten* のように *rückwärts* を使う事例があるという (Lewi 1875: 18-19 を参照)。

2.3. 統語論におけるオーストリア的特徴

Lewi は「オーストリア語法」の章に入れてはいないものの、次の統語論的な特徴も Lewi はオーストリア的なものとみなしている。本論文では、これらも「オーストリア語法」というカテゴリーで捉えておくこととする。

「分詞」の章を見てみると、状態を表す自動詞の過去分詞を *haben* 支配でなく *sein* で支配させることが、オーストリアおよびドイツ南部的な特徴として挙げられている。その際、Lewi (1875) は前述の通り、オーストリアの変種を誤りあるものと見なしている。「*liegen* は、*sein* で結ぶよりも *haben* で結ぶほうがはるかに良い」(Lewi 1875: 6) と評している。さらにまた、Lewi (1875) によれば、前置詞の格支配もプロイセン的な標準ドイツ語では 2 格支配されるものが、3 格支配になっていることがある (Lewi 1875: 14 を参照)。

以上、Lewi の『オーストリアの標準ドイツ語』(1875) で確認されていたオーストリア語法を見てきた。当時のオーストリア人は、プロイセン的な標準ドイツ語とオーストリア語法の狭間でどのような言語的实践を行っていたのであろうか。以下の章では、この点についてシュトラウスとマーラーの書簡をもとに考察する。

3. 言語資料としての J. シュトラウスと G. マーラーの書簡

3.1. J. シュトラウスと G. マーラーについて

ヨハン・シュトラウス 2 世 (Johann Baptist Strauss, 1825-1899) とグスタフ・マーラー (Gustav Mahler, 1860-1911) の書簡を分析する前に、まず 2 人の生い立ちに触れておきたい。

シュトラウスは、1825 年にウィーン近郊で生まれた。音楽家としてデビューする 18 歳までに、彼は市民として生きていくためのさまざまな教育を受けた。とりわけギムナジウムでの学習については、「躊躇なく 4 学年分の『文法クラス』を成し遂げ、1841 年に良い成績で学校を去った」(Strauss 1983: 5) という。さらに彼はギムナジウムを出た後に、工業専門学校 (Polytechnikum) を経て、会計事務についての個人授業を受けることになる。この個人授業は、息子に音楽家にはなつてほしくない父の勧めによるものである。しかし、のちに息子は数々の音楽についての基礎教育を受け (Endler 1998: 81-83 を参照)、1844 年には父と同じ職業である音楽家としてデビューを果たすのである。

マーラーは、1860 年にオーストリア帝国領内のボヘミアにあるカリシュトで生まれる。ユダヤ系家系ではあるものの、ドイツ語を話す家庭で育った (Finscher 2004: 813 を参照)。シュトラウスと同じように、マーラーは 1869 年にギムナジウムに入学したが、ギムナジウム在学時に大きな転機を迎える。15 歳になる年であった 1875 年の夏、ロノフという農園に滞在していた。その時、ロノフの近隣にある「モラヴァン農園のグスタフ・シュヴァルトは、『シュヴァーベン公エルンスト』の音楽に感銘を受け、マーラーをウィーン音楽院に進学させようと目論んだ」(田代 2009: 23)。のちにシュヴァルトの目論見は成功し、同年 9 月から、マーラーはウィーン音楽院に入学した。また、1877-1878 年にはウィーン大学にも通い、そこで音楽以外にもさまざまな講義を受けた (Finscher 2004: 813 を参照)。(ただ

し、卒業資格は取得していない。)

以上のように、シュトラウスもマーラーも音楽家としてデビューする前に、音楽についての教育を受けただけでなく、ギムナジウム等で教養も身につけていたことがわかる。

3.2. 「JSS コーパス」と「GM コーパス」

幸いなことに、シュトラウスが書いた言語資料が全 10 巻にまとめられて出版されている。筆者は、この書簡集からシュトラウスが書き手である書簡のみを集積し、デジタル化した。これを「ヨハン・シュトラウス書簡データコーパス」(以下、「JSS コーパス」と呼ぶ)と名付けておく。「JSS コーパス」は、695 通の書簡を収録し、総語数は約 15 万語 (147,721 語) である。この「JSS コーパス」に集積した書簡の内訳は、私的な書簡が 550 通 (79%)、公的で改まった書簡が 126 通 (18%)、分類が困難であったものが 19 通 (3%) であった²⁾。したがって、「JSS コーパス」において収録した書簡の大半が比較的親密な相手に宛てて書いた手紙であることがわかる。

シュトラウスと同じように、マーラーも、さまざま相手に対して書いた多くの書簡が現在も残っている。本論文では、友人や出版業者などさまざまな相手に書いた手紙を収録している Mahler (1996) と、マーラーの妻アルマに宛てて書いた手紙を収録している Mahler (1995) をもとに、1875 年から 1911 年までの手紙を収集し³⁾、デジタル化した。これを「グスタフ・マーラー書簡データコーパス」(以下、「GM コーパス」と呼ぶ)と名付けた。「GM コーパス」の内訳は、私的な書簡が 707 通 (92%)、公的で改まった書簡が 26 通 (8%)、分類が困難であったものが 5 通 (1%) であり、「GM コーパス」は「JSS コーパス」以上に親密な相手に向けて書いた手紙を多く収録するコーパスであることがわかる。

以上の 2 つのコーパス、「JSS コーパス」および「GM コーパス」におけるデータをもとにして、次章以降では一世代ほど年齢の離れた 2 人のオーストリア人音

2) 書簡のなかで相手を親称の *du* で呼んでいるかいるか、呼びかけ文で「友」(*Freund*) という言い方や愛称形を使って呼びかけているかという観点で、相対的に親密な関係と判断できる書簡を私的な書簡として分類した。

3) 本論文のタイトルには「19 世紀後半」とあるが、マーラーの手紙は彼が亡くなる 1911 年まで含めて考察することにする。

楽家を書いたことばの傾向について論じることにする。

4. シュトラウスとマーラーの書簡に共通する言語使用の傾向

4.1. プロイセン的標準ドイツ語の使用

まず「JSS コーパス」と「GM コーパス」の分析に入る前に、両コーパスのドイツ語に明確に見て取れることを述べておく。それは、1 章で紹介したモーツァルトの 2 人の息子のように、シュトラウスとマーラーの書いた手紙も全体としてドイツ(プロイセン)的な標準ドイツ語を用いているということである。例として、両者がそれぞれ 1892 年に書いたものを一通ずつ見てみよう。

最初に紹介する文章は、シュトラウスが 1892 年 4 月 2 日、弟エドゥアルトに宛てた手紙の冒頭部分である。

Samstag, 2 April.

Lieber Eduard!

Ich habe für Deine Concerte in Hamburg eine neue Pizzicato-Polka skizzirt. Sie ist dem Zeitgeschmack gemäß diesmal etwas interessanter gehalten (ohne eigentlich concertant in Bezug auf musikalischen Gehalt). Sie läßt manierirte Vortragsweise zu - dies die Hauptsache einer Pizzicatonummer. Dort wo der Ton nicht singt - kann nur in einer ich möchte sagen koketten Vortragsweise ein Erfolg liegen — da weder Piano noch Forte in einer solchen aparten Piece genügende Abwechslung bieten.

土曜日、4 月 2 日

親愛なるエドゥアルト!

君のハンブルクでのコンサートのために、新しいピチカート・ポルカの草稿を作ってみたんだ。ポルカは今回流行に合わせて、関心を引くようなものを取り入れてみた(音楽的な内容に関しては、ほんとうに協奏曲風なものがないのだけれど)。このポルカは、気取ったような演奏形式を可能にしてくれる — このことが、ピチカートという曲目の最も重要なことだ。そこで音が歌わなければ、色っぽい演奏方法でしか成功しない、と私は言いたい。一だから、そのような独特の魅力をもった作品では、弱い音でもなく、強い音でもなく、十分な変化をもたせて演奏する [とよい]。(Strauss 1996: 173-174, 筆者訳)

次に紹介する文章は、マーラーが 1892 年 11 月から 12 月に、親友フリードリヒ・レーアに宛てて書いた手紙の冒頭部分である。

Liebster Fritz! Ich habe mich unbändig gefreut, von Dir, altem Freund, wieder was Geschriebenes zu sehen! - Gerne würde ich erwidern! Aber zum 3. mal [?] schickt Bülow eben wieder zu mir und fordert mich auf, sein 3. Konzert zu dirigieren! Diesmal wird's wohl wahr sein, und ich muß wieder über Hals und Kopf auswendig lernen!

このうえなく親愛なるフリッツ！君から、この旧友から、また手紙を貰えて、僕はいま有頂天だ！一返事を出したいが！ちょうど今、またしてもビューローが三度目 [?] に手紙をよこして、彼の第三コンサートを僕に指揮するようにというのだ！今度は本当かもしれない、それで僕はがむしゃらに暗譜しなければならぬんだ！⁴⁾ (Mahler 1996: 128)

このように、シュトラウスもマーラーも、基本的にプロイセン的な標準ドイツ語で書簡を書いている。

4.2. オーストリア語法の調査項目

しかし、シュトラウスとマーラーの書簡には、非プロイセン的あるいはオーストリア的と呼べる表現がないのだろうか。本章からは、2 章で概観した Lewi (1875) や、ÖWB (2009)、Hügel (1873)、Reiffenstein (2009a, 2009b)、Ammon (1995) を参考にして以下のような調査項目を定めて、オーストリア的表現が本当に見られないのか調べることにする。

調査項目は、統語論、形態論、正書法、語彙論の 4 分野 (A ~ D) にわたり、全部で 7 種類の言語表現・言語現象 ((1) ~ (7)) に関して調査を進めることにする。なお、7 種類の言語表現・言語現象に関する具体的な調査項目は、全 225 項目 (非正規形で 193 項目、正規形で 32 項目⁵⁾) である。

4) マーラー (2008: 110) より日本語訳を引用した。なお、この引用文中にある [] や語の上にある傍点は、本論文の筆者による補いではなく、引用文にあったもの (原文ママ) である。

5) ここで言う非正規形とは、Lewi (1875)、ÖWB (2009)、Hügel (1873)、Reiffenstein (2009a, 2009b)、Ammon (1995) を参考にして定めた、オーストリアで用いるとされる言語表現・言語現象のことである。それに対し正規形とは、プロイセン的な規範に則っ

A 【統語論の分野】

(1) 2 格支配の前置詞における 2/3 格支配

以下の 4. 3. 1 では、非正規形が 4 項目 (wegen+3 格、trotz+3 格、während+3 格、statt+3 格といった、2 格支配の前置詞を 3 格とともに用いたもの)、正規形が 4 項目 (wegen+2 格、trotz+2 格、während+2 格、statt+2 格といった、2 格支配の前置詞を 2 格とともに用いたもの)、計 8 項目を調べる。

(2) 状態動詞における過去分詞の sein/ haben 支配

4. 3. 2 および 5. 1. 1 では、(sein 支配を用いた) 非正規形で 5 項目、(haben 支配を用いた) 正規形で 5 項目、計 10 項目を調べる⁶⁾。

B 【形態論の分野】

(3) オーストリア方言的音声特徴が現れたことば

5. 2. 1 で非正規形の 8 項目 (loß, a などの、上部ドイツ語的な音声の特徴が現れたもの) を調べる⁷⁾。

(4) 命令形単数

4. 4. 1 および 5. 2. 2 では、非正規形で 3 項目 (Lewi (1875) がオーストリア的な形として挙げた gebe, lese, sehe)、正規形で 4 項目 (gebe, lese, sehe に対応する gib, gieb, lies, sieh という、一般的なドイツ流の標準ドイツ語で見られる形)、計 7 項目を調べる。

(5) e 音の脱落に関するもの

4. 4. 2 および 5. 2. 3 では、非正規形で 1 例 (e 音が抜けた heut)、正規形で 1 例 (e 音の脱落が起きておらず、一般的にドイツの標準語で見られる heute)、計 2 項目を調べる。

C 【正書法の分野】

(6) 正書法

た言語表現・言語現象を指す。

6) この調査項目における非正規形とは、gestanden (sein)、beigestanden (sein)、gelegen (sein)、gesessen (sein)、geschlafen (sein) といった、状態動詞が sein 支配で用いられている表現のことである。それに対応して、正規形としては、gestanden (haben)、beigestanden (haben)、gelegen (haben)、gesessen (haben)、geschlafen (haben) を調査した。

7) この調査項目における非正規形とは、一般的な標準ドイツ語であれば lass や ein といったように書かれることばに、オーストリアを含む上部ドイツ語における音声的な特徴が現れた、loß (lass) や a (ein)、mi (mich)、ma (mir)、net (nicht)、jo (ja)、hob (hab)、i (ich) のことを指している。

5.3.1 では、非正規形で 19 項目 (gekomen や Theil など)、正規形で 18 項目 (gekommen や Teil といった)、全 37 項目を調べる。

D【語彙論の分野】

(7) オーストリアに特有な語彙

5.4.1 において、Ammon (1995) が挙げている、オーストリアに特有な語彙リストをもとに、非正規形 153 項目⁸⁾を調べる。

以上 (1) から (7) の言語表現・言語現象について 2 つのコーパスを調査し、その結果を比較することによって、2 つのコーパスに共通するオーストリア的な言語表現・言語現象が判明する。本論文では、両コーパス間に共通するの否有意な差があるのかを検定することで、この点を明らかにする。その結果、本論文で取り上げる言語表現・言語現象の中でも、どれが比較的一般に使われていたオーストリア語法であると想定できるが明らかになる。他方また、どの言語表現・言語現象が各人に特徴的であると言えるのかについても考察を行う。したがって、まず本章では以下で、「JSS コーパス」および「GM コーパス」に共通する言語表現・言語現象を分野別に確認し、次章では「JSS コーパス」と「GM コーパス」それぞれに特徴的な言語表現・言語現象を確認することにする。

4.3. 統語論的共通点

4.3.1 前置詞の 2/3 格支配

正しくは 2 格を支配する前置詞を 3 格で結ぶという現象が、Lewi (1875) にはオーストリア的特徴として書かれている (2.3.2 章を参照のこと) が、実際シュトラウスとマーラーはどのように 2 格支配の前置詞を使っていたのだろうか⁹⁾。以下の表をご覧ください。

8) 詳しくは、Ammon (1995: 157-162) にある、Speisen, Mahlzeiten (料理、食事について)、Haushalt, Kleidung (家事、衣服) についての語彙リストを参照のこと。

9) 調査では、男性・中性名詞の単数形を支配する前置詞を調査対象とした。

〔表 3〕：「JSS コーパス」および「GM コーパス」における前置詞の使用

グループ	項目：非正規形	JSSコーパス	GMコーパス	項目：正規形	JSSコーパス	GMコーパス
前置詞	wegen+3格	1	0	wegen+2格	20	12
前置詞	trotz+3格	1	2	trotz+2格	5	7
前置詞	während+3格	0	2	während+2格	13	7
前置詞	statt+3格	0	0	statt+2格	1	3

この表では、左側に（ここでは3格支配の）非正規形の結果、右側に（ここではプロイセン的な規範に従った2格支配の）正規形の結果を載せている。シュトラウスもマーラーも2格支配の前置詞をプロイセン的な規範に則って、2格支配でよく用いていることがわかる。では、wegen+3格など項目ごとに2コーパス間で有意差が見られるものはあるのだろうか。本論では、項目ごとに「JSS コーパス」および「GM コーパス」に対数尤度比¹⁰⁾において有意差が見られれば、以下の凡例表のように印をつけている。

〔表 4〕：「JSS コーパス」と「GM コーパス」の比較表における凡例

対数尤度比の基準	凡例
5% 基準を超えている	対象の値の下に線 (例) <u>34</u>
1% 基準を超えている	対象の値に囲い (例) 34
0.1% 基準を超えている	対象の値に囲い&太字 (例) 34
0.01% 基準を超えている	対象の値に囲い&太字のイタリック体にする (例) <i>34</i>

つまり、表4の凡例より、表3における調査結果には、項目レベルで有意差があるところは見られない。では、前置詞というグループで見ても、両音楽家の言語使用に有意差はないだろうか。対数尤度比検定を行ったところ、2格支配の前置詞における使用に関しては、シュトラウスもマーラーも今回調べた項目においては、3格支配で用いる非正規的な使用、そして2格支配で用いる正規的な使用のどちらにおいても、2つのコーパスの結果に有意差は見られなかった¹¹⁾。規範的

10) この対数尤度比の計算に関して、本論ではランカスター大学 (Lancaster University, the United Kingdom) の Log-likelihood calculator (<http://ucrel.lancs.ac.uk/llwizard.html>) を用いた。本論文でのコーパス分析では、antconc という多言語対応のコンコーダンサーを使用した。

11) 非正規形 (3格支配) の使用に関しては、JSS が2件 (0.001%)、GM が4件 (0.002%) であることをもとに検定すると、対数尤度比は0.45となり、有意差は確認できなかった。同じように正規形 (2格支配) の使用に関しては、JSS が39件 (0.03%)、GM が29件 (0.02%) であることをもとに検定すると、対数尤度比は3.02となり、有意差は確認で

には2格支配である前置詞について、シュトラウスもマーラーも、2格の正規的な形でほとんど書いており、たまに3格の非正規的な形で書くことはあったものの、その使用傾向に差は見られなかった。

4.3.2. 状態動詞における過去分詞の sein 支配

シュトラウスもマーラーも haben 支配である状態動詞の過去分詞を非正規的な sein で支配するというのが同じ程度に見られた。まず以下の表をご覧ください。

[表5]: 「JSS コーパス」および「GM コーパス」における状態動詞の sein/ haben 支配の使用

グループ	項目: 非正規形	JSSコーパス	GMコーパス	項目: 正規形	JSSコーパス	GMコーパス
sein-haben 支配	gestanden (sein)	0	5	gestanden (haben)	0	1
sein-haben 支配	beigestanden (sein)	1	0	beigestanden (haben)	0	0
sein-haben 支配	gelegen (sein)	4	4	gelegen (haben)	0	0
sein-haben 支配	gesessen (sein)	0	4	gesessen (haben)	0	1
sein-haben 支配	geschlafen (sein)	0	0	geschlafen (haben)	2	13

上記の表にあるように、gestanden (sein) と gesessen (sein) において、マーラーがシュトラウスよりも多いことが対数尤度比検定の結果として確認できる。では、sein 支配のグループ全体で有意差はあるのだろうか。対数尤度比検定より、状態動詞の sein 支配の使用においては、シュトラウスもマーラーも今回調べた項目においては、2つのコーパス間に有意差は見られなかった¹²⁾。つまり、状態動詞の sein 支配に関しては、今回調べた項目のことばに限ると、両コーパスとも同じ傾向で用いていることがわかった。

4.4. 形態論的共通点

4.4.1. プロイセン的規範による命令法単数

プロイセン的規範に則った命令法単数 liesなどを、シュトラウスとマーラーはどれくらい使っているのだろうか。以下の表をご覧ください。

きなかった。

- 12) 非正規形 (sein 支配) の使用に関しては、JSS が 5 件 (0.003%)、GM が 13 件 (0.008%) であることをもとに検定すると、対数尤度比は 2.74 となり、有意差は確認できなかった。

[表 6] : 「JSS コーパス」および「GM コーパス」における命令法単数（非正規形および正規形）の使用

グループ	項目: 非正規形	JSSコーパス	GMコーパス	項目: 正規形	JSSコーパス	GMコーパス
命令形	gebe	3	0	gieb	0	0
				gib	6	5
命令形	lese	1	0	lies	0	5
命令形	sehe	0	0	sieh	3	11

表 6 より、lies において、マーラーの方が多いことが、対数尤度比検定からも確認できる。では、命令法単数の正規形全体で有意差はあるのだろうか。対数尤度比検定より、命令法単数（正規形）の使用に関しては、シュトラウスもマーラーも今回調べた項目においては、2 つのコーパス間に有意差は見られなかった¹³⁾。つまり、プロイセン的規範による命令法単数の使用に関しては、今回の調査項目の範囲においては、両コーパスとも使用傾向が同じであることがわかった。

4.4.2. e 音脱落（脱落していないもの）

Lewi (1875) とほぼ同じ時期に出版された Hügel (1873) の『ウィーン方言。ウィーンの民衆語についての辞典 (Der Wiener Dialekt. Lexikon der Wiener Volkssprache.)』において、次のような例文が見られる。

[...] I' hab' heut' mein' Anwurf bei der Sali g'macht.

私は今日、ロザリーアの婿探しをした。(Hügel 1873: 24, 筆者訳)

この文章で ' によって省略されているところを元に戻すと、Ich habe heute meinen Anwurf bei der Sali gemacht. となる。つまり、e/en が脱落する現象はドイツ南部およびオーストリアの表現として捉えられる¹⁴⁾。18 世紀のモーツァルト家の手紙を研究した Reiffenstein (2009a) も、この e 音脱落が上部ドイツ語的な特徴であると述べている (Reiffenstein 2009a: 55 を参照)。

13) 正規形の使用に関しては、JSS が 9 件 (0.01%)、GM が 21 件 (0.01%) であることをもとに検定すると、対数尤度比は 3.53 となり、有意差は確認できなかった。

14) e 音脱落を行なっている例として、シュトラウスの場合では、シュトラウス作曲のボルカ (作品 291) 'S giebt nur a Kaiserstadt, 's giebt nur a Wien (帝都は一つ、ウィーンは一つ) や、シュトラウス作曲のワルツ (作品 471) Heut' ist heut' (今日は今日) が挙げられる。

以上のことを踏まえて、本論では heute の e 音の語尾音が脱落しているか、いないかを e 音脱落というグループのもと、「JSS コーパス」と「GM コーパス」について調査してみた。すると、以下のような結果が得られた。

[表 7] : 「JSS コーパス」および「GM コーパス」における heut/ heute の使用

グループ	項目: 非正規形	JSSコーパス	GMコーパス	項目: 正規形	JSSコーパス	GMコーパス
e音の脱落	heut	32	5	heute	406	432

表 7 より、e 音が正しく入った heute の使用に関しては、シュトラウスもマーラーも今回調査した結果では、どちらも非常に多く使っていることが確認でき、2つのコーパス間に有意差¹⁵⁾は見られなかった。

以上、「JSS コーパス」と「GM コーパス」において結果に差が見られない言語使用のグループ、つまり両者に共通する点を見た。今までに挙げた両コーパスに共通する特徴の中で、状態動詞の過去分詞における sein 支配と 2 格支配の前置詞における 3 格支配は、Lewi (1875) がオーストリア的であると述べた特徴である。つまり、状態動詞の過去分詞における sein 支配と 2 格支配の前置詞における 3 格支配は、「JSS コーパス」と「GM コーパス」の 2 つのコーパスで同程度に確認されたオーストリア的特徴であることになり、今回調べた限りでは、2 章で整理した「オーストリア語法」の中でも比較的一般的に使われたものであるように考えることができよう。

5. シュトラウスとマーラーの書簡それぞれに特徴的な言語使用

では、「JSS コーパス」と「GM コーパス」にそれぞれ特徴的な言語使用は何であろうか。本章では、統語論、形態論、正書法、語彙の範囲でそれぞれシュトラウスとマーラーにおいて言語使用の傾向が異なったグループを整理することにする。

15) 対数尤度比は 0.89 で、5% 基準でさえ下回る結果となった。

5.1. 統語論的相違点

5.1.1. 状態動詞における過去分詞の *haben* 支配

sein 支配は 4.3.2 でも確認したとおり、シュトラウスもマーラーも同程度使っているが、*haben* 支配はどうだろうか。4.3.2 の表 5 より、*sein* 支配では両者のコーパスの差がそれほど顕著ではなかったが、右側の正規形欄にある *haben* 支配を見てもみると、「JSS コーパス」では 5 項目中 4 項目で 0 が並んでいたり、「GM コーパス」では *geschlafen (haben)* の結果においてシュトラウスに 1% 基準を超える有意差があるなど、両コーパスで傾向が違うように思われる。実際、状態動詞の *haben* 支配について結果を検定してみると、状態動詞の *haben* 支配の使用に関しては、項目合計における比較でマーラーはシュトラウスよりも正規形の *haben* 支配を用いていることがわかった¹⁶⁾。つまり、状態動詞の *haben* 支配の使用に関しては、マーラーの方がシュトラウスよりも、プロイセン的な標準語ドイツ語に拠っていることがわかる。

5.2. 形態論的相違点

5.2.1. オーストリア方言の音声特徴が現れたことば

シュトラウスとマーラーの書簡には、方言的な音声特徴が現れたことばはないのだろうか。まず、「JSS コーパス」には、以下のような文章が見いだせる。シュトラウスが二番目の妻アンゲリカ・シュトラウス (Angelika Strauss, 1850-1919) に宛てて書いた書簡に、次のような文章がある。

Das wäre ganz unmöglich, weil es mir Bedürfnis, mit Dir zu plaudern, denn es sitzt d'Liab (sic!) noch immer fest d'rinnen, ich muß halt thun, was sie will. Na! I will's mir net aussereißn laßen!!!

Loßt mi gehen, sekirts mi net! I beholt d' Liler! nehmt's Euch an Ondere! Es gibt jo Weiber gn'ua in der Welt. I hob's jo a net gestohlen — i hob m'as holt a suacha müßn. Wos es mocht's, is ka Kunst — i hobs ober für mi!!! net für Eng geholt!!! Mein g'hörts und won

16) 正規形 (*haben* 支配) の使用に関しては、JSS が 2 件 (0.001%)、GM が 15 件 (0.009%) であることをもとに検定すると、対数尤度比は 9.67 となり、1% 基準での有意差が確認できた。

s'es anrürts so loß Eng daschlogen mehr seid's so net werth es Diabsg'sindl. So a Rauberbua kinnt ma g'stohl'n wern. Schaut's daß weiter köm'ts — es könt's mit mia net thun, mein Klana Finger is mehr werth ols a Dutzat solcher G'schwufen mit Haut und Ban, oder a ohne Haut! Es seid's erst d'Woren! Loßt Euch ham geig'n von mir — i wär [!] ma den Bogen schon schmiern!

私にとって、君とおしゃべりをすることは必要なのだから、そんなことは絶対に無理だ。というのも、ずっと愛ははっきりとあり続けるし、その愛が求めるように、私はするしかないのだ。そうとも！私は自分を裏切りたくはないのだ！！

行かせてくれ、そして私のことを怒らないでほしい！私はリラル¹⁷⁾を手離さないでおきたい。君たちは別の人を取ればいい！世界にはたくさんの女性がいるじゃないか。私はリラルを盗んだのではない—私はとにかくリラルを探し出さなければならなかったのだ。君たちがつくったものは、芸術作品などではない—しかし私は私のためにリラルを手に入れたのであって、君たちのためではない！！リラルは私のものである。もし君たちがリラルに触れようものなら、私は君たちに殴り殺させるだろう。そうすれば、もはや君たちは価値のない存在だ。君たちは盗賊の一味なのだから。そのような盗賊の子は私から盗みができることだろう。見ろ、君たちがいなくなったぞ！—やつらは私に何もできないのだ。私の小さな指は12人の女の子より価値があるのだから。皮膚と四肢を勘定に入れても、もしくは皮膚を入れなくても、私の方が価値は上だろう！君たちはただのならず者だ！君たちを私のもとから追い出させておくれ—今にきつと [君たちを追い出すために]弓に油を塗っておくからな！¹⁸⁾ (Strauss 1990: 113-114, 筆者訳)

上記の引用箇所は、その直前まで一貫して書かれていたプロイセン的な標準ドイツ語から一変し、いきなり方言へと変化した部分である。Rauberbua（盗賊の少年）や *sekirts mi net!*（私のことを怒らないでくれ！）の *sekirts* といったように、語彙そのものがドイツ流の標準ドイツ語とは異なることばもある一方、この文章

17) アンゲリカの愛称。

18) ヴァイオリンの弓を使用する前に、松脂を塗る作業がある。その作業から、シュトラウスは「(敵を追い出す) 準備をする」というのをメタファーとして表現した、と筆者は解釈した。なお、方言部分の解説については、Paul Rössler 教授 (Regensburg 大学) から助言を得ることができた。

では loß (lass のこと¹⁹⁾) や a (不定冠詞 ein を表すオーストリア方言、Castelli 1847: 25、河野 2006: 85 を参照) などということばもあり、オーストリア方言の音声的な特徴を反映したことばが使われていることがわかる。

では、他にもオーストリア的な音声的な特徴を反映した語形の使用例はあるだろうか。ここで出てきた loß などのオーストリアの方言形をもとに検索した結果が以下の表である。

[表 8]: 「JSS コーパス」および「GM コーパス」におけるオーストリア的方言形態の使用

グループ	項目:非正規形	JSSコーパス	GMコーパス
オーストリア方言	loß*	3	0
オーストリア方言	mi	4	0
オーストリア方言	ma	2	0
オーストリア方言	net	7	1
オーストリア方言	jo	2	0
オーストリア方言	hob*	3	0
オーストリア方言	i	8	0
オーストリア方言	a	10	0

表 8 より、シュトラウスで見られたようなオーストリア的であると考えられる音声的な特徴を反映した方言形態は、マーラーにおいてはたった 1 件を除いて含まれないことがわかった。(その 1 件である net は、方言と言うよりも日常語の形態と解釈することも可能である。) 項目ごとの検定結果を見ても、マーラーがシュトラウスを上回る項目はない。実際、表 8 について検定してみると、項目合計における比較でシュトラウスがマーラーよりも用いていることがわかった²⁰⁾。

さらに、「JSS コーパス」で確認できたオーストリア方言の音声特徴が現れたことばを詳しく見てみると、興味深いことに、それらを使った相手は全て生活圏がオーストリアである人物であった。以下の表をご覧ください。

19) 「ウィーン方言をはじめとするバイエルン方言では、通常の [a] の音の他に、a と綴られていても o に近く発音される音がある」(河野 2006: 28) という音声的特徴が、lass の a の記述に反映されたものと考えられる。

20) オーストリア方言の音声特徴の現れたことばの使用に関しては、JSS が 39 件 (0.02%)、GM が 1 件 (0.0005%) であることをもとに検定すると、対数尤度比は 51.10 となり、0.01% 基準での有意差が確認できた。

[表 9] : 表 8 の非正規形の検索結果についての詳細²¹⁾

総該当件数	宛先	出身/生活・活動圏(没地)	手紙の掲載ページ	該当項目
30	Angelika Strauss	オ/ウ(オ)	03113-03114	loB*
				mi
				ma
				net
				jo
				hob*
				i
				a
3	Camillo Walzel	ド/ド・ハ・ (1847年から)ウ(ウ)	10231	mi
				net
				i
2	Angelika Strauss	オ/ウ(オ)	03093-03094	i
				a
2	Josef Priester	ウ?	06295-06296	a
1	Angelika Strauss	オ/ウ(オ)	03111-03113	a
1	Carl Haslinger	ウ/ウ(ウ)	01254-01257	a
39	総計			

これらの非正規形、すなわちオーストリア語法の使用は、プロイセン的なドイツ語の規範に従おうという意識のあったはずのシュトラウスが、言語圏が近い人物たちを前にして無意識のうちに用いたオーストリア語法であると考えられることができるかもしれない。

5.2.2. オーストリア的な命令法単数

4.4.1 では、プロイセン的規範による命令法単数をシュトラウスもマーラーも同程度使っていることを確認したが、Lewi (1875) に載っている lese のような非正規形の命令法単数はどうだろうか。4.4.1 の表 6 より、正規形の命令法単数では両者のコーパスの差がそれほど顕著ではなかったが、左側の非正規形欄にある命令法単数を見てみると、「JSS コーパス」では *sehe* 以外の項目では該当例が確認できるが、「GM コーパス」ではどの項目においても該当例が見当たらないことから、両コーパスで傾向が違うように思われる。

では、「JSS コーパス」で発見できた例を確認してみることにしよう。例えば、*lese* について、以下のような使用例があった。この書簡は、シュトラウスが「出版業者、作曲家」(Strauss 2007: 330) であったカール・ハスリンガー (Carl Haslinger, 1816-1868) に宛てたものである。

21) 出身/生活・活動圏(没地)にある略記の意味は、「オ」がオーストリア、「ウ」がウィーン、「ド」がドイツ、「ハ」がハンガリーである。

Du Hund Du! Lesenachfolgende Noten

なあ、お前！次の楽譜²²⁾を読んでくれよ！（Strauss 1983: 293, 下線は執筆者による）

先ほど 2 つのコーパス間に非正規形の命令法単数を使用する傾向が違うように思われると述べたが、実際、非正規形の命令法単数について結果を検定してみると、非正規形の命令法単数の使用に関しては、項目合計における比較でシュトラウスはマーラーよりも用いていることがわかった²³⁾。

5.2.3. e 音の脱落

4. 4. 2 では、e 音の脱落が起きていない *heute* では、シュトラウスもマーラーもどちらも非常に多く使っていること、そして 2 つのコーパス間に有意差は見られなかったことが確認できた。では、e 音の脱落が起きた *heut* ではどうだろうか。4. 4. 2 の表 7 より、正規形の *heute* では両者のコーパスの差がそれほど顕著ではなかったが、左側の非正規形欄にある *heut* を見てみると、「JSS コーパス」では 32 件、「GM コーパス」では 5 件確認でき、両者のコーパスには有意差²⁴⁾も確認できた。

ここで、「JSS コーパス」で確認できた *heut* の例について詳しく見てみることにしよう。以下の表をご覧ください。

22) 実際に次には楽譜が 4 節書き込まれている。

23) 非正規形の使用に関しては、JSS が 4 件、GM が 0 件であることをもとに検定すると、対数尤度比は 6.07 となり、5% 基準での有意差が確認できた。

24) 対数尤度比は 25.57 で、0.01% 基準を超える結果となった。

[表 10] : heut と heute の「JSS コーパス」での検索結果²⁵⁾

詳細			内訳	件数	heut-heute		件数				
出身/生活・活動圏 (没地)	宛先	p/o/u			heut	heute					
チ/ウ(ウ)	[Eduard Hanslick]	o	1	32	heut	heute	408				
ド/ウ(ウ)	Hugo Wittmann	o	2								
オ/ウ(オ)	[Angelika Dittrich]	p	1								
オ/ウ(オ)	[Angelika Strauss]	p	1								
オ/ウ(オ)	[Angelika Strauss]	p	1								
オ/ウ(オ)	[Angelika Strauss]	p	1								
オ/ウ(オ)	[Angelika Strauss]	p	1								
ウ/ウ(オ)	Gustav [Lewy]	p	1								
ド/ド(ス)	[Friedrich August Simrock]	p	1								
チ/チ・ウ(ウ)	[Josef Simon]	p	1								
ウ/ウ(オ)	Gustav [Lewy]	p	1								
チ/チ・ウ(ウ)	[Josef Simon]	p	1								
ウ/ウ(ウ)	Eduard [Strauss]	p	3								
ウ/ウ(ウ)	Eduard [Strauss]	p	1								
ウ/ウ(ウ)	[Adele Strauss]	p	1								
ウ/ウ(ウ)	Adele Strauss	p	1								
ウ/ウ(ウ)	Adele Strauss	p	1								
ウ/ウ(ウ)	Adele Strauss	p	1								
ウ/ウ(ウ)	Eduard Strauss	p	1								
ウ/ウ(ウ)	[Adele Strauss]	p	1								
ウ/ウ(ウ)	Adele [Strauss]	p	1								
ウ/ウ(ウ)	Adele Strauss	p	1								
ウ/ウ(ウ)	Adele Strauss	p	1								
ウ/ウ(ウ)	Adele Strauss	p	1								
ド/ド(ス)	Friedrich August Simrock	p	1								
チ/チ・ウ(ウ)	[Josef Simon]	p	1								
ウ/ウ(ウ)	[Carl] Haslinger	p	2								
									略	意味	
									ウ	ウィーン	
									オ	オーストリア (ウィーン以外)	
									バ	バイエルン	
									ド	ドイツ(バイエ ルン以外)	
					チ	チェコ					
					ハ	ハンガリー					
					ポ	ポーランド					
					ロ	ロシア					
					ス	スイス					

表 10 から、非正規形 heut は正規形である heute よりも数が少ないながらも、さまざまな相手に対して使っていることが分かる。そのうち 29 件が私的な書簡に分類されるものである。また、私的な書簡に分類された 29 件のうち、Friedrich August Simrock の 2 件を除くと、27 件が生活・活動圏という面で、ウィーンに関係ある人物であることも読み取れる。それに対し、全 32 件の中には公的な書簡に分類されるもの（灰色で示してあるもの）も 3 件あり、書簡の宛先は、Eduard Hanslick と Hugo Wittmann の 2 人だった。この 2 人は、出身地はオーストリアではない（チェコとドイツである）ものの、生涯のうちほとんどウィーンで活動した人物で、1 人目の Hanslick は、約 40 年もの間ウィーン大学で教授を務めた人

25) この表で同じ人物の宛先が複数回出てきているのは、手紙ごとに該当件数を処理しているためである。つまり、表の上から 3 番目から続く Angelika Strauss (Dittrich は旧姓) は、それぞれ別の手紙で 1 件ずつ heut が見つかったことを示している。なお、詳細欄にある p, o, u とは、私的な書簡 (privat)、公的で改まった書簡 (öffentlich)、分類が困難であった書簡 (unklar) を表している。

物だった。また2人目の Wittmann は活動地がウィーンであった。つまり、この公的な書簡でありながらもシュトラウスがオーストリア異形である *heut* を使っている人物2人は、シュトラウスと同じ方言圏の中部バイエルン方言圏にいる人物とすることができる。

5.3. 正書法的相違点

5.3.1. th/t などの綴り方

ここでは、同じことばで違う書法が確認できたことばについて、「JSS コーパス」と「GM コーパス」で検索した結果を紹介することにする。以下の表をご覧ください。

[表 11] : 「JSS コーパス」と「GM コーパス」による正書法の分野についての検索結果

グループ	項目:非正規形	JSSコーパス	GMコーパス	項目:正規形	JSSコーパス	GMコーパス
正書法	*kome*	18	0	*komme*	475	687
正書法	*nome*	5	0	*nomme*	97	84
正書法	imer	3	0	immer	160	339
正書法	*Somer*	2	0	*Sommer*	33	80
正書法	*stime*	9	0	*stimme*	127	74
正書法	*Sume*	3	0	*Summe*	11	6
正書法	*Jäner*	3	0	*Jänner*	25	22
正書法	*Sontag*	4	1	*Sonntag*	57	64
正書法	*Donerstag*	22	0	*Donnerstag*	7	26
正書法	*Mäner*	2	0	*Männer*	11	7
正書法	dan	5	0	dann	175	343
正書法	wan	2	0	wann	25	57
正書法	kan	27	0	kann	564	449
正書法	köne*	16	0	könne*	344	268
正書法	desshalb (+case)	2	0	deßhalb (+case)	45	0
正書法	deshalb	20	14			
正書法	dass (+case)	19	8	daß (+case)	1141	1436
正書法	*theil*	340	56	*teil*	24	185
正書法	*nöthig*	85	22	*nötig*	4	34

表 11 では、上 6 つの項目では動詞の *kommen* と *nehmen* の過去分詞 *genommen*、*immer*、*Sommer*、*stimmen*、*Summe* が入る語で真ん中の *m* を一つで書くか（非正規形）、それとも二つで書くか（正規形）、についてそれぞれのコーパスで調べた結果である。続く 8 つの項目では *Jänner*、*Sonntag*、*Donnerstag*、*Männer*、*dann*、*wann*、*kann*、*können* が入る語で真ん中の *n* を一つで書くか（非正規形）、それとも二つで書くか（正規形）、についてそれぞれのコーパスで調べた結果である。さらに下の 3 つの項目では、*desshalb* や *dass* の *ss* が *ß* でもって書かれるのか、そして

desshalb の ss を s 一つで書く例がどれだけあるのかを調べている。最後の teil、nötig が入る語を調べた項目では、t が t あるいは th のどちらで書いているのかを調べている。

上記の表より、左側の非正規形を見ると、「GM コーパス」の結果ではシュトラウスに対して有意差がある項目はないことがわかる。しかし、正規形の場合は、マーラーの方がシュトラウスよりも使用傾向は多いように考えられる。では、正書法のグループ全体で2つのコーパスを比較すると、有意差はあるだろうか。対数尤度比検定を行った結果、非正規的な書法に関しては、マーラーよりシュトラウスの方が用いていることがわかった²⁶⁾。一方、正規的な書法によることばに関しては、シュトラウスよりマーラーの方が用いていることがわかった²⁷⁾。つまり、今回調べた項目のことばに限ると、シュトラウスよりマーラーの方が、正規的な書法に従っているということになる。

5.4. 語彙的相違点

5.4.1. オーストリアに特有な語彙

本論では、Ammon (1995: 157-162) にあるオーストリアに特有な語彙リストをもとに全 153 項目を調べた。以下の表は、153 項目のうち1つ以上例が見つかったものを整理したものである。

-
- 26) 非正規的な書法の使用に関しては、JSS が 587 件 (0.40%)、GM が 107 件 (0.06%) であることをもとに検定すると、対数尤度比は 444.43 となり、0.01% 基準での有意差が確認できた。
- 27) 正規的な書法の使用に関しては、JSS が 3325 件 (2.25%)、GM が 4161 件 (2.48%) であることをもとに検定すると、対数尤度比は 17.47 となり、0.01% 基準での有意差が確認できた。

[表 12] : 「JSS コーパス」と「GM コーパス」によるオーストリアに特有な語彙
 についての検索結果

グループ	項目: 非正規形	検索対象語	意味	JSSコーパス	GMコーパス
語彙	*beuschel*	Beuschel	die Lunge	4	1
語彙	*erd*pfel*	Erdapfel	die Kartoffel	2	1
語彙	*fisole*	Fisole	Grüne Bohne	1	0
語彙	*hend*	Hend	das Hähnchen	0	2
語彙	*heurig*	heurig	diesjährig	1	8
語彙	*jaus*	jausen, Jause	das Kaffeetrinken	4	11
語彙	*marille*	Marille	Aprikose	1	0
語彙	*nachtmah*l*	Nachtmahl	Abendessen	0	4
語彙	*ribisel*	Ribisel	Johannisbeere	2	0
語彙	*semmel*	Semmel	Brötchen	0	2
語彙	*zibebe*	Zibebe	Rosine	0	1
語彙	*zwetschke*	Zwetschke	Zwetschge	0	1
語彙	*fauteuil*	Fauteuil	Sessel	0	3
語彙	*haube*	Haube	Mütze	0	1
語彙	*haue*	Haue	Hacke	0	1
語彙	*p*lster*	Polster	Kissen	1	2
語彙	*sack*	Sack	die Tasche	4	2
語彙	*stiege*	Stiege	Treppe	0	1
語彙	*stutzen*	Stutzen	Kniestrumpf	0	4
語彙	*vorhaus*	Vorhaus	(Haus)Flur	1	0

表 12 より、「GM コーパス」はシュトラウスに対して 3 項目において有意差があり、マーラーの方がシュトラウスよりも使用傾向は多いように考えられる。

ここで、「GM コーパス」で見つかった、オーストリアに特有な語彙をふくんだ文章をいくつか見てみることにしよう。例えば、「間食、おやつ（を食べる）」を意味する *Jause, jaus(n)en* では以下のような文があった。

Damit wir ein vernünftiges Wort miteinander reden können, müßten wir Abends, nach der Jause, ein wenig spazieren gehen!

お互い理性的に話し合えるように、おやつの後、晩に少し散歩に行かなくては！

(Mahler 1995: 83-85, 筆者訳)

Ich mache, ob schön ob Regen täglich meinen Nachmittagsspaziergang nach Toblach gebe meine Briefe an Dich auf, und jausne in der Conditorei (aber nur Milchkaffee).

晴れだろうと雨だろうと、私はトーブラッハへお昼の散歩へ行き、君への手紙を

[郵便に] 出す。そして、喫茶店で（ミルクコーヒーだけにしているが）おやつ

をとるのだ。(Mahler 1995: 382-383, 筆者訳)

また「夕食（を食べる）」を意味する *Nachtmahl, nachtmahlen* では以下のような文があった。

Ich denke, Mama wird einfach bei uns nachtmahlen, und Karl holt sie dann ab.

ママはとにかく私たちのところで夕食を食べて、カールがそのあとママを迎えにくることになると思う。(Mahler 1995: 195-196, 筆者訳)

Mit dem sitze ich nun faktisch jeden Abend nach vollbrachter Arbeit beim Nachtmahl in einem gegenüberliegenden Beisel, und befinde mich wie in alten Zeiten.

ほとんど毎晩仕事をやり終えたあと、彼 [クルツィツァノヴスキー]²⁸⁾ と向かいの酒場で夕食をともにすると、昔に戻ったような気分になる。(Mahler 1995: 429-431, 筆者訳)

では、オーストリアに特有な語彙のグループ全体で2つのコーパスを比較すると、有意差はあるだろうか。対数尤度比検定を行った結果、今回調べた項目のことばに限ると、シュトラウスよりマーラーの方が、オーストリアに特有な語彙を含んでいることがわかった²⁹⁾。

6. 結論：シュトラウスとマーラーの書簡から見えてくること

最後に、4章および5章で扱った結果を改めて整理することにする。

28) クルツィツァノヴスキー兄弟 (ルドルフとハインリヒ) は、大学時代の親しい友人である (de La Grange 1995: 431 参照)。ここでは単数形 (*dem*) であることから、どちらかだと考えられるが、ここではハインリヒである可能性が高い。この手紙がミュンヘンで出されたものだとされているが、ミュンヘンにはハインリヒが住んでおり、ルドルフはヴァイマルで活動していたからである。

29) オーストリアに特有な語彙の使用に関しては、JSS が 21 件 (0.01%)、GM が 45 件 (0.03%) であることをもとに検定すると、対数尤度比は 6.14 となり、5% 基準での有意差が確認できた。

[表 13]: 「JSS コーパス」および「GM コーパス」の調査結果概要

グループ	非正規 JSS	非正規 GM	有意差	正規 JSS	正規 GM	有意差
方言の音声的特徴のあることば	39 件	1 件	JSS>GM			
命令法	4 件	0 件	JSS>GM	9 件	21 件	なし
前置詞	2 件	4 件	なし	39 件	29 件	なし
状態動詞	5 件	13 件	なし	2 件	15 件	JSS<GM
境に特有な語彙	21 件	45 件	JSS<GM			
正書法	587 件	101 件	JSS>GM	3325 件	4161 件	JSS<GM
e 音脱落	32 件	5 件	JSS>GM	406 件	432 件	なし

表 13 より、4 章でも確認した通り、「JSS コーパス」および「GM コーパス」に共通する（有意差のない）言語使用の分野には、前置詞の 3 格支配と状態動詞の *sein* 支配という非正規形があった。これらは、Lewi (1875) がオーストリア的と見なしていた特徴であった。したがって、2 格支配の前置詞における 3 格支配と状態動詞の *sein* 支配は、今回調べた限りでは、2 章で整理した「オーストリア語法」の中でも比較的一般的に使われたものであると考えられる。

次に、シュトラウスとマーラーそれぞれに特徴的なこと（「JSS>GM」と「JSS<GM」）も整理することにする。すると、「JSS<GM」であることには正規形による表現が含まれているのに対して、「JSS>GM」は非正規形に多く見られることに気づく。4 章のはじめでは、両者の手紙は全体的にドイツ流の標準ドイツ語に則っており、「JSS コーパス」および「GM コーパス」のどちらも比較的規範的であると述べた。しかし 5 章の結果（ここでは「JSS>GM」と「JSS<GM」）をもとに再考すると、「JSS<GM」の方だけに正規形表現が特徴として含まれていることから、マーラーの言語使用の方がシュトラウスの言語使用と比べてより規範的であるということを今回の調べた範囲では言うことができる。

ただし、「JSS<GM」であると考えられるものの中には、正規的表現だけではなく、非正規的表現も含まれている。そこで、「JSS>GM」および「JSS<GM」について、非正規的表現の特徴に絞って見てみることにしよう。すると、「JSS>GM」では形態論に関わる特徴が 3 つ（オーストリア方言の音声特徴が現れたことば、非正規的な命令法単数、e 音の脱落が起きた *heut*）、正書法に関わる特徴が 1 つ（非正規的な書法のことば）となっている。とりわけ「JSS コーパス」における e 音の脱落が起きた *heut* については、改まった手紙を出すような相手であっても、シュ

トラウスと同じ方言圏（中部バイエルン方言圏）を共有している人であれば、e音の脱落が起きた非正規的なことばが用いられていることがわかった。したがって、シュトラウスの言語使用においては、広く捉えると文法に関わる分野において非正規的な表現が出やすい傾向があるように考えられる。それに対し「JS-S<GM」では語彙に関わる特徴が1つ（オーストリアに特有な語彙）となっている。つまり、マーラーの言語使用においては、語彙に関わる分野において非正規的な表現が出やすい傾向があるように考えられる。

以上のように筆者が行なった調査の限りでは、2人の音楽家は家族も含めたさまざまな相手にプロイセン的な規範性の高い文章を書き残していた。このことには、オーストリアにおいて18世紀以来ずっと、プロイセン的な規範文法に基づくドイツ語教育が行われていたことが関わっている可能性がある。しかし、そのような規範的な文章を書き連ねた書簡の中にも、当の本人たちとしてはプロイセン的に「正しく」書いているつもりでも、気づかない形でオーストリアの特徴が書簡のテキストのなかに忍び込んだところがあったのであろう。それがシュトラウスの場合にはとりわけ文法の分野であり、マーラーの場合にはとりわけ語彙の分野であるといえるのではないだろうか。

シュトラウスとマーラーが書簡を基本的にオーストリアの方言ではなく、プロイセン的な標準ドイツ語に則って書いたことは明らかである。しかし彼らが19世紀後半に書き綴ったものは、オーストリアの方言という制約からはほぼ逃れることができたものの、どうしてもいくつかのオーストリア語法が忍び込んでいたものであった。それが現実であったからこそ、そのような当時のオーストリア人のことばに当時の言語学者が「オーストリアの標準ドイツ語」という名称を与えたのであろう。

参考文献

一次文献

Lewi, Hermann (1875): *Das österreichische Hochdeutsch. Versuch einer Darstellung seiner hervorstechendsten Fehler und fehlerhaften Eigenthümlichkeiten*. Wien: Bermann & Altmann.

Mahler, Gustav: de La Grange, Henry-Louis et al. (Hrsg.) (1995): *Ein Glück ohne Ruh'*. *Die Briefe von Gustav Mahlers an Alma*. Berlin: Siedler.

Mahler, Gustav: Blaukopf, Herta (Hrsg.) (1996): *Briefe*. Zweite, nochmals revidierte Auflage. Wien: Paul Zsolnay.

マーラー、グスタフ、ヘルタ・ブラウコップフ (編) (2008) 『マーラー書簡集』法政大学出版局。

Strauss, Johann (Sohn): Im Auftrag der Johann Strauß-Gesellschaft Wien gesammelt und kommentiert von Franz Mailer (1983, 1986, 1990, 1992, 1996a, 1996b, 1998, 1999, 2002, 2007): *Leben und Werk in Briefen und Dokumenten*. Band. 1-10. Tutzing: Schneider.

二次文献

Ammon, Ulrich (1995): *Die deutsche Sprache in Deutschland, Österreich und der Schweiz. Das Problem der nationalen Varietäten*. Berlin, New York: Walter de Gruyter.

Castelli, Ignaz Franz (1847): *Wörterbuch der Mundart in Oesterreich unter der Enns*. Wien: Tendler.

Clyne, Michael G. (1984): *Language and society in the German-speaking countries*. London, New York, New Rochelle, Melbourne, Sydney: Cambridge University Press.

Endler, Franz (1998): *Johann Strauss. Um die Welt im Dreivierteltakt*. Wien, München: Amalthea.

エンドラー、フランツ (1999) 『ヨハン・シュトラウス 初めて明かされたワルツ王の栄光と波瀾の生涯』(喜多尾道冬、新井裕訳) 音楽之友社。

Finscher, Ludwig (Hrsg.) (2004): *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*. Allgemeine

- Enzyklopädie der Musik begründet von Friedrich Blume. Zweite, neubearbeitete Ausgabe. Les-Men. Personenteil 11. Stuttgart: Metzler.
- Finscher, Ludwig (Hrsg.) (2009): Die Musik in Geschichte und Gegenwart. Allgemeine Enzyklopädie der Musik begründet von Friedrich Blume. Zweite, neubearbeitete Ausgabe. Strat-Vil. Personenteil 16. Stuttgart: Metzler.
- Glück, Helmut (Hrsg.) (2010): *Metzler Lexikon Sprache*. Stuttgart: Metzler.
- Hügel, Franz Seraph (1873): *Der Wiener Dialekt. Lexikon der Wiener Volkssprache*. Wien, Pest, Leipzig: Hartleben.
- 木村靖二 (編) (2001) 『ドイツ史』 山川出版社。
- Kloss, Heinz (1978): *Die Entwicklung neuer germanischer Kultursprachen seit 1800*. 2. erw. Aufl. Düsseldorf: Schwann.
- Koch, Peter and Wulf Oesterreicher (1985) Sprache der Nähe—Sprache der Distanz. Mündlichkeit und Schriftlichkeit im Spannungsfeld von Sprachtheorie und Sprachgeschichte. In: *Romanistisches Jahrbuch*, 36, 15-43.
- 河野純一 (2006) 『ウィーンのドイツ語』 八潮出版社。
- 小宮正安 (2000) 『ヨハン・シュトラウス ワルツ王と落日のウィーン』 中央公論新社。
- 南塚信吾 (編) (1999) 『ドナウ・ヨーロッパ史』 山川出版社。
- Muhr, Rudolf/ Richard Schrodtt/ Peter Wiesinger (Hrsg.) (1995): *Österreichisches Deutsch. Linguistische, Sozialpsychologische und sprachpolitische Aspekte einer nationalen Variante des Deutschen*. Wien: Hölder-Pichler-Tempsky.
- Österreichisches Wörterbuch* (2009) Hrsg. im Auftrag des Bundesministeriums für Unterricht, Kunst und Kultur auf der Grundlage des amtlichen Regelwerks. 41., aktualisierte Aufl. von Otto Back u.a. Wien: Österreichischer Bundesverlag Schulbuch.
- Reiffenstein, Ingo (2009a): Sprachvariation im 18. Jahrhundert: Die Briefe der Familie Mozart Teil I. In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik*, Band 37, 47-80.
- Reiffenstein, Ingo (2009b): Sprachvariation im 18. Jahrhundert: Die Briefe der Familie Mozart Teil II. In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik*, Band 37, 203-220.
- Rössler, Paul (1994): *Entwicklungstendenzen der österreichischen Rechtssprache seit dem*

- ausgehenden 18. Jahrhundert. Eine syntaktische, stilistische und lexikalische Untersuchung von Studiengesetzen und -verordnungen.* Frankfurt a. M.: Peter Lang.
- Rössler, Paul (1997): *Die deutschen Grammatiken der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts in Österreich. Ein Beitrag zur Reform der deutschen Schriftsprache.* Frankfurt a. M.: Peter Lang.
- Schlobinski, Peter (2005): Netzwerk-Untersuchungen. In: Ulrich Ammon et al. (Hrsg.): *Soziolinguistik*. 2. Aufl., Bd. 2. Berlin/New York, 1459–1469.
- Schmidt, Wilhelm (1996): *Geschichte der deutschen Sprache. Ein Lehrbuch für das germanistische Studium*. 7., verbesserte Auflage, erarbeitet unter der Leitung von Helmut Langner. Stuttgart/ Leipzig: S. Hirzel.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子（編）（2011）『歴史語用論入門』大修館書店。
- 高橋秀彰（2010）『ドイツ語圏の言語政策 ヨーロッパの多言語主義と英語普及のはざままで』関西大学出版部。
- 田代權（2009）『グスタフ・マーラー 開かれた耳、閉ざされた地平』春秋社。
- Wiesinger, Peter (2000): Österreich und die deutsche Sprache von der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts bis zum Ende der Ersten Republik. In: Stubkjær, Flemming Talbo (Hrsg.): *Österreich. Kultur und Identität -heute und vor 100 Jahren*. S. 45-61. Odense: Odense University Press.
- Wiesinger, Peter (2003): Aspekte einer österreichischen Sprachgeschichte der Neuzeit. In: *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft*. Band 2.3, 2 Auflage, 2971-3001. Berlin, New York: Walter de Gruyter.
- Wiesinger, Peter (2014): *Das österreichische Deutsch in Gegenwart und Geschichte*. 3., aktualisierte und neuerlich erweiterte Auflage. Wien, Berlin: LIT VERLAG.

（くじらおか・さつき 学習院大学大学院人文科学研究科博士前期課程）

„Österreichisches Hochdeutsch“ in der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts

Eine Analyse anhand der Briefe von den Musikern Johann Strauss und Gustav Mahler

Satsuki Kujiraoka

Die deutsche Sprache ist eine plurizentrische Sprache, deren hochdeutsche Variante nicht nur in Deutschland, sondern auch in anderen deutschsprachigen Regionen gebildet wurde, weshalb es auch in Österreich ein „österreichisches Hochdeutsch“ gibt, das eigene österreichische Ausdrücke enthält, wenn man Österreich als ein Zentrum des Hochdeutschen ansieht. Nach Wiesinger (2003) tauchte der Begriff „österreichisches Hochdeutsch“ in den 1870er Jahren auf, als es insbesondere unter dem Begriff „kleindeutsch“ einen Dualismus zwischen Preußen und Österreich gab. In der Untersuchung „Das Österreichische Hochdeutsch. Versuch einer Darstellung seiner hervorstechendsten Fehler und fehlerhaften Eigenthümlichkeit“ (1875) zeigt der Verfasser Hermann Lewi die „hervorstechendsten Fehler und fehlerhaften Eigenthümlichkeiten“ des von ihm so genannt „österreichischen Hochdeutsch“ an. Auf jedem Fall enthält das „österreichische Hochdeutsch“ österreichische Ausdrücke, sonst würde es keinen Unterschied zwischen dem österreichischen und dem preußischen Hochdeutsch geben.

Nach Reiffenstein (2009b) folgte die beiden Söhne von Wolfgang Amadeus Mozart, die 1784 und 1791 im Wien geboren waren, „den jetzt allgemein gültigen hochdeutschen Normen“, wenn sie in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts Briefe geschrieben haben. Deshalb kann man sich vorstellen, dass zwei Musiker, Johann Strauss (1825-1899) und Gustav Mahler (1860-1911), die in Österreich geboren waren, sich besonders in Wien betätigten und dort auch starben, den preußischen Regeln auch folgten. Ich untersuchte in dieser Abhandlung die Briefen dieser beiden Musiker und ziele darauf ab, die Sprachwirklichkeit der deutschen Sprache im Österreich des 19. Jahrhunderts zu erklären.

Bei der Untersuchung sammelte ich verschiedene Briefe von Strauss (1983, 1986, 1990, 1992, 1996a, 1996b, 1998, 1999, 2002, 2007) und machte daraus ein Korpus, das aus ca. 150.000 Wörtern (aus 695 Briefen) besteht. Außerdem sammelte ich verschiedene Briefe von Mahler (1995, 1996) und machte daraus ein anderes Korpus, das aus ca. 170.000 Wörtern (aus 772 Briefen) besteht. Diese Briefe der zwei Korpora habe ich in drei Gruppen eingeteilt (in vertraute Briefe, förmliche Briefe und andere Briefe). Kriterien für diese Einteilung waren u.a. der Gebrauch der Du-Anrede oder von Spitznamen usw.

Soweit ich diese Korpora analysierte, lässt sich ermitteln, dass sowohl Strauss als auch Mahler den Regeln des preußischen Hochdeutsch gut folgen; aber man kann einerseits feststellen, dass sowohl Strauss als auch Mahler eine gemeinsame Tendenz in ihrem Sprachgebrauch haben; andererseits haben sie je eigene Tendenzen, die in jedem der Korpora gefunden werden kann.

In Briefen von Strauss kann man bestimmte österreichische Merkmale finden, die sich auf das grammatische Feld beziehen: Beispielsweise benutzt Strauss die österreichischen Formen der singularischen Imperative, u. zw. „gebe“ (statt „gieb“) usw. Außerdem kann man den Wegfall der Laute „e“ oder „en“ bei „heut“ („heute“) und „mein“ (statt „meinen“) usw. finden. Dieser Wegfall kommt nicht nur in den vertrauten Briefen, sondern auch den förmlichen vor. Diese förmlichen Briefe schrieb Strauss an Adressaten, die in Österreich wohnten, d. h. er benutzte diese österreichischen Merkmale gegenüber Menschen, die ihm sprachlich nahestanden, obwohl die Briefe selbst doch eher steif sind. Wie Strauss befolgt Mahler einerseits die Regeln des preußischen Hochdeutsch gut; es gibt bei ihm sogar keine Sätze im österreichischen Dialekt, soweit ich untersucht habe; andererseits kann man aber in den Briefen bestimmte österreichische Merkmale finden, die sich nicht auf das grammatische Feld beziehen, sondern auf den Wortschatz: Beispielsweise benutzt Mahler den österreichischen Wortschatz häufiger als Strauss (ich habe mich dabei an den bei Ammon (1995: 157-162) als österreichisch angegebenen Wörter orientiert).

Als Ergebnis dieser Untersuchung kann man feststellen, dass Strauss und Mahler beinahe in allen Fällen sowohl in vertraulichen Briefe als auch in förmlichen Briefe nicht-österreichische Ausdrücke, u.zw. Ausdrücke nach preußischer Sprachnorm schreiben, d. h. sie sind in der preußischen Sprachnorm sehr bewandert. Österreichische Merkmale

haben sich dennoch in die Briefe dieser beiden Männer eingeschlichen, auch wenn sie beabsichtigen, mit preußischen Hochdeutsch korrekt zu schreiben; auf dem grammatischen Feld in den Briefen von Strauss und im Bereich des Wortschatzes bei den Briefen von Mahler werden diese Einbrüche identifiziert. Daraus lässt es sich vermuten, dass diese verschiedenen Merkmale des Sprachgebrauchs von Österreichern „österreichisches Hochdeutsch“ genannt wurden.